



2015年度 ロザリー・レナード・ミッチェル記念奨学金募集要項

立教大学ジェンダーフォーラムは、本学女子学生寮であったミッチェル館の理念を引き継ぎ、ジェンダーについての教育・研究活動の拠点として 1998年4月に誕生しました。本奨学金は、本学学部および大学院に在籍する学生で、ジェンダーに関わる活動・研究をした者(団体)、あるいは活動・研究を計画している者(団体)を幅広く対象とします。

書類提出期間：2015年10月1日(木)～2015年10月23日(金) 17:00まで
 書類提出先：学生部学生厚生課奨学金係・新座キャンパス事務部学生課・独立研究科事務室
 採用発表：11月30日(月) 学生部学生厚生課奨学金掲示板、新座キャンパス事務部奨学金掲示板、ジェンダーフォーラム掲示板(10号館通路)に掲示予定
 授与式：12月上旬(予定)

(A) ジェンダーフォーラム論文賞

対象：学部学生・大学院生(個人・団体)
 支給額：優秀：10万円、佳作：5万円
 採用件数：1～4件
 選考方法：論文審査
 提出書類：①ジェンダーフォーラム論文賞申込書* ②論文(日本語2万字以内の未発表論文)
 備考：執筆にあたってはジェンダーフォーラム『年報』投稿規定に従うこと。

(B) 活動・研究助成金

対象：学部学生・大学院生(個人・団体)
 支給額：総額20万円
 採用件数：1～2件
 選考方法：書類審査・面接
 提出書類：①活動・研究助成金願書* ②奨学金使途を含む活動・研究計画書(A4用紙 3枚程度 書式自由)
 面接日時：2015年11月25日(水) 18:30～を予定。個々の面接時間はあらかじめ連絡する。
 面接会場：立教大学池袋キャンパス、16号館第2会議室(予定)
 備考：採用者(団体)は活動・研究の中間報告を翌年3月末に提出の上、最終的な報告書または論文を11月末に提出すること。提出の活動報告書または論文は、ジェンダーフォーラム『年報』に掲載する。

【ロザリー・レナード・ミッチェル記念奨学金(A)・(B)の申込書(願書)の利用目的】
 上記の申込書(願書)で取得した個人情報、奨学金採用者(団体)の選考および発表のために利用する。採用者(団体)の論文・報告書等は『年報』に掲載する。また、奨学金制度広報のため冊子、WEB等に採用者名を記載することがある。以上に同意した上で、申込書(願書)を提出すること。その他、個人情報の取扱いについては、ジェンダーフォーラムのホームページ(<http://www.rikkyo.ac.jp/aboutus/philosophy/activism/gender/>)を参照すること。

※ 詳細や不明な点はジェンダーフォーラム事務局にお問い合わせください。

ジェンダーフォーラム事務局(池袋キャンパス 6号館 1階) Tel: 03-3985-2307 E-mail: gender@rikkyo.ac.jp

* 申込書、願書はジェンダーフォーラム事務局、学生部学生厚生課窓口、新座キャンパス事務部学生課、独立研究科事務室窓口にあります。ホームページ上からもダウンロードできます。(http://www.rikkyo.ac.jp/aboutus/philosophy/activism/gender/)

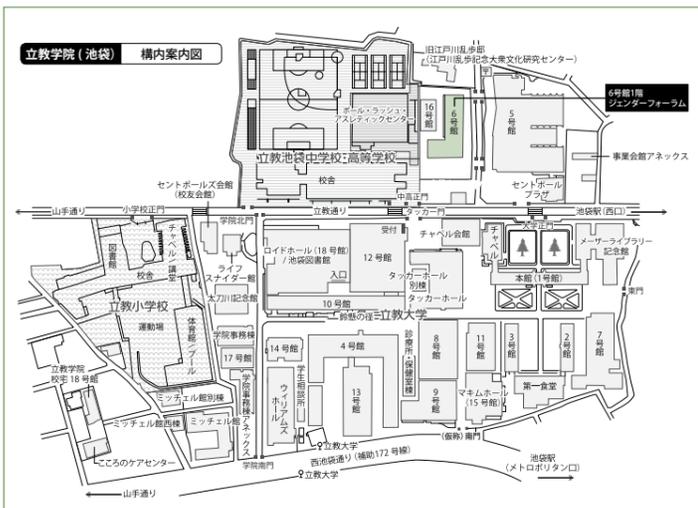


ジェンダーフォーラムは2013年3月に、ミッチェル館から6号館へ事務室を移転しました。

立教大学ジェンダーフォーラム

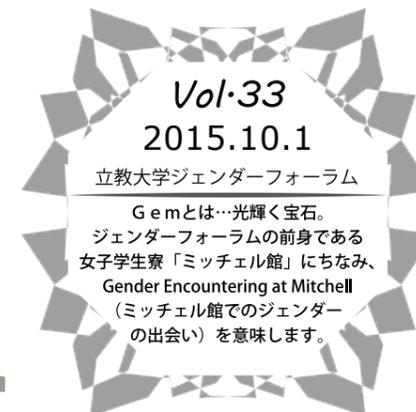
開室日：毎週月曜日～金曜日
 開室時間：10:00～16:00
 場所：立教大学池袋キャンパス 6号館 1階
 TEL&FAX: 03-3985-2307
 E-mail: gender@rikkyo.ac.jp
 URL: <http://www.rikkyo.ac.jp/aboutus/philosophy/activism/gender/>

詳細は、10号館通路のジェンダーフォーラム掲示板またはHPをご覧ください。



Gem

Rikkyo Gender Forum
News Letter



2015年度公開講演会(2015年7月6日(月))

あらためて「男女共同参画社会形成」、 「女性の活躍促進」を問う

講師：内藤 和美 氏(芝浦工業大学教授)

「男女共同参画」ということばには、ある種のむずかしさがつきまとう。この概念には、変化をうながすような、それでいて大きな前進をはばむような、奇妙な不条理さを感じたりしていた。男女共同参画社会基本法が成立してから15年あまりが経ち、男女をめぐる状況は社会においても政策においても変化してきている。それでも、男女の平等が達成されたとはとてもいえない(2014年度、日本の男女平等指数は世界の142ヶ国中104位)し、女性の社会進出が進むなか、家庭と職場における女性の負担は増えていっているようにも感じられる。なぜこのような状況になっているのだろうか。今後、この国はもっと生きやすい社会に変わっていくのだろうか。そもそも「男女共同参画」とはどのような理念だったのだろうか?

今年度の公開講演会でご登壇いただいた内藤和美氏は、日本における男女平等のための取りくみを、研究者として、そして女性として長年続けてこられた第一人者だ。その内藤先生に、今回、「男女共同参画」とはいかなる概念なのか、あらためて振り返っていただくこととなった。

そもそも男女共同参画社会基本法は、その成立の過程で、複雑な多面性を背負いこむこととなった。内藤先生によれば、同法には、女性の人権の向上を「目的」としている面と、女性を社会情勢の変化に対応するための、おもに経済的な「手段」として試みている面のふたつがある。この法律を制定させるためには、この「手段」の面を強調することが必要だった。その結果制定された同法には、男女の性別役割分業の流動化を課題とし、さらに政策手段としてポジティブ・アクションを明記したことなど、画期的な面があった。いっぽうで、成立後もこの「手段」の面が現実において優位に立つことがおおいということが、今日の「男女共同参画」をめぐるむずかしい状況を作りだしている。さまざまな努力や苦難、戦略的な妥協の末に成立した男女共同参画社会基本法は、矛盾を抱える存在でもあって、今日の「女性の活躍促進」も、「手段」の面ばかりが強調されやすいという問題が表面化したものだといえる。しかしやはり、同法はこの国における女性の生き方の可能性をひろげた画期的な法律であった。また、「手段」としての面を強調することにより、はじめて可能となる対話もある。この概念の生まれた背景とそのむずかしさを理解したうえで、「男女共同参画」および「女性の活躍」という概念と組み合っていくことが求められるのだ。

今回の講演会には、男女共同参画の旗の下、さまざまな団体で実際に働いている方々がたくさんいらっしゃった。その方々の熱意と努力に敬意をいただいたのと同時に、これまでの女性の社会進出の歴史を知らない若い人たちに、ぜひこの経緯を知ってもらいたいと感じた。ライフコースの多様化とともにジェンダーを取り巻く状況はますます複雑になっているが、先人たちの努力を知ることが、現在の状況に対応していく柔軟な力を育てていくことにつながるのではないだろうか。その先に、「男女共同参画」の次の、新しいジェンダーのあり方が見えるように願いたい。

松浦 恵美(ジェンダーフォーラム事務局員/お茶の水女子大学ほか非常勤)

リレーコラム



ケイトリン・ジェナーのカミングアウトをめぐる

石川 千暁 (ジェンダーフォーラム所員／本学文学部助教)

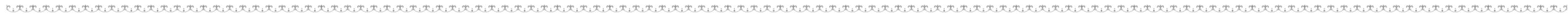
2008年から5年間、米国に留学していた。フェミニストを名乗る女性教授の多さ、レズビアンやゲイを公言している学生の多さ、あるいは一つのジェンダーに特定されることを拒む教員の着任を目撃して、感動にも近い衝撃を覚えたものであった。大学の外でも革新的な出来事がいくつか起こった。2011年、軍隊において同性愛者に性的指向を隠すことを強いる法律が廃止され、2013年には結婚を男女間のものと定義する結婚防衛法を違憲とする最高裁判決が下されたのだ。

昨今そんな米国のメディアを騒がせている人物が、ブルース・ジェナー改めケイトリン・ジェナーである。ジェナーといえば70年代のオリンピック陸上10種競技における金メダリストとして知られていた。「全アメリカのヒーロー」とさえ呼ばれたジェナーは、鍛え抜かれた身体と爽やかな笑顔で人々を魅了し、男性性規範を象徴するようなスター・アスリートであった。現

役を退いたのちもメディアに露出していたが、ここ数年は、リアリティ番組『カーダシアン家のお騒がせセレブライフ』において奔放な娘たちと妻に翻弄される父／夫というイメージを確立していた。番組はジェナーと妻クリスが不仲を経て別居、離婚へと至る様子も記録していた。

今春、憶測が飛び交う中、65歳のジェナーはトランスジェンダーであることをカミングアウトする。ケイトリンと自らを名付け直した彼女は続けて、整形手術を経てなされた劇的な変身を『ヴァニティ・フェア』誌の表紙で披露し、トランスの人々のスポークスパーソンとなることを宣言する。これまでカーダシアン／ジェナー一家に関する人々の反応が羨望と嫌悪の入り混じったものであったのに対し、ケイトリンは圧倒的なサポートの声をもって迎えられている。冒頭で述べたような革新的な米国の顔である。

複雑な気分させられるのは、けれども、有名デザイナーのワンピースを着こなし、完璧な化粧と入念にセットされた髪で街を闊歩するケイトリンのイメージが、米国における美の基準にきわめて忠実だという点である。ケイトリンに対する圧倒的なサポートは、彼女が外見において、上流階級の健康的な白人女性として「通る」ことと—さらには実年齢よりずっと若く見えることと—明らかに無関係ではない。ケイトリン受容の陰で温存される経済格差、人種主義、健常者中心主義、高齢者蔑視。彼女をめぐる言説が今後どのように展開していくか、注目される場所である。



埼玉県男女共同参画推進センター (With You さいたま) 主催

大学生による男女共同参画研究発表会「アカデミズムの扉を開く」

開催日：2015年3月7日(土)

会場：With You さいたま

発表者：藤原 あゆみ (立教大学) ほか埼玉大学3名、芝浦工業大学1名

コメンテーター：内藤 和美 (芝浦工業大学教育イノベーション推進センター・男女共同参画推進室教授)、

大橋 稔 (城西大学語学教育センター助教) *所属は当時のものです。

3月7日、With You さいたま (埼玉県男女共同参画推進センター) 内において、男女共同参画基礎講座「大学生による男女共同参画研究発表会—アカデミズムの扉を開く」が開催されました。一昨年に引きつづき、今年も立教大学の学生(学部生)が参加し、埼玉県と東京都の各大学の学生とともに、ジェンダーにまつわる「研究と学

第65回ジェンダーセッション (2015年6月22日(月))

「婦人雑誌の読者と生活合理化という思想— —家庭の近代化を牽引した知識階級の妻たち

登壇者：小関 孝子 氏 (一般社団法人社会デザイン研究所特別研究員)

登壇者の小関孝子さんは、私が立教大学大学院 21世紀社会デザイン研究科の前期課程に仕事をしながら在籍していた時期に、後期課程に在籍していたので先輩に当たる。この時期に私の勤務している公民館に「全国友の会」の支部の皆さんが、家計簿の講習会を行うため公民館の会議室を借りたいとの申し出があった。公民館では、政治・宗教・営利活動が禁止されているため、どのような団体なのか小関さんに確認させていただいたのが、「友の会」ならびに「婦人の友」の存在を知ったきっかけであった。

婦人雑誌の読者と生活合理化が、主たるテーマであったが、小関さんによると、時代と共に生活合理化の概念が変わっていったとのことである。明治・大正期の写真や新聞記事等を基に、時代背景を解説し、合理化の概念について解説していただき、理解しやすい内容であった。

一例として、和装から洋装への奨励は、大きな効果があったようだ。合理化の目的は、家事時間を短縮し読書等の教養に充てるということであるが、短縮して生まれた時間をどのような活動に充てたのか興味深い。また、「婦人之友」誌上に、植村正久や長谷川如是閑が執筆したとのことであったが、婦人雑誌にどのような文を書いたのか調べてみたい。

今回は、主に「婦人之友」創刊の明治期から戦後の復興期までを対象とし、特に関東大震災と太平洋戦争への対応については、詳細に説明していただいたが、特に戦時期は、したたかに生き延びたという感じがした。

今回のセッションは、戦後復興期までであったので、結びに司会の萩原なつ子氏から「次は1955年以降の話も伺いたい」とのコメントがあったが、全く同感である。高度経済成長期や男女雇用機会均等法の制定などに、生活合理化はどのようになされたのか興味深い。この間の1975年、食品メーカーの「私作る人、ボク食べる人」というCMが放送中止になったことがある。しかし、この時代、私のまわりの女性はもとより、多くの女性たちは、このCMを問題視してなく、むしろ問題視した女性団体に対しての批判が多かったような印象がある。「婦人之友」の読者の皆さんも、雑誌の内容等から考えると同様な感じがする。

実際に「婦人之友」を手にとってみると、表紙は多くの女性雑誌にみられるような女性が表紙を飾っているようなものではなく、地味なデザインの装丁で、A5サイズのコンパクトなもので、日常の調理や、清掃時に傍らに置き活用するのに便利である。サブタイトルに「生活を愛する人とともに113年」とあるが、「ベストセラーよりもロングセラー」の見本のような「婦人之友」誌の今後の行方が、大変気になる場所である。

鶴田 和也 (埼玉県朝霞市中央公民館職員、21世紀社会デザイン研究科前期課程OB)

びの成果」を発表しました。

今回は、5名の学生が、男性の子育て支援、理工系男子学生のジェンダー・アイデンティティ、文学作品におけるジェンダー規範への抵抗、「女子」ということばの使われ方、日本におけるセクシュアル・マイノリティ<運動>の変遷といった多彩なテーマについて、自身の専門分野の方法論ののっとり、それぞれ興味深い発表をしてくださいました。

発表ののち、観客として参加された一般の方々との質疑応答と、コメンテーターの先生方からのコメントとアドバイスがありました。その後の懇親会では、発表者と参加者のあいだで親密であたたかい交流が持たれました。近年の多様なジェンダーのあり方に対する新しい見方に気づかされた、刺激と共感に満ちた非常に有意義な講座でした。



(ジェンダーフォーラム事務局)